

トツレフンバ題問働

特115

788

中西伊之助著

經濟運動
と
政治運動

第一編

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始



出版部設置に就いて

見渡す限り事業縮少、傭人解雇、失業者續出、そして一方には強盜、強姦、殺人、自殺等實に物騒千萬な世の中だ。お役所筋から、「節約せよ」「貯蓄せよ」と強制されても、無産労働階級は、之以上節約のしようがない、勿論貯蓄なんか出来るものか。生きやうとする慾求はあつても、労働者の生きんが爲の手段は刻々に遮ぎられつゝある。即ち支配階級は、人類大多數を占めて居る労働階級の人格を無視し、その生命を輕視して居るのである。斯うした社會状態は、社會組織のごこかに欠陥のある事を裏書するものだ。須らく労働者は労働者自らの力によつて解放せねばならない。大阪交通労働組合は、一般民衆諸君が寸暇を利用して、理想社會建設の爲研究せられん事を希望して、茲に出版部を設置し、パンフレット刊行を志した次第である。

尙此小冊子は毎月一、二編宛發行の豫定であるから、民衆諸君は宜しく御愛讀せられん事を乞ふ。

一九二五年七月二十三日

編者

小序

このパンフレットは、大阪で半分を書き、東京で半分を書いた、だから前後重複、序説甚だ一貫しないかも知れない。殊に、出版部の方からの突然の命令ではあり、復案もなにもなかつたので、漫然と筆をつけて行つた。それで、ごうも不満足なものができ上つた。讀者の寛恕を乞ひたい。

もつと順序を立て、もつと系統的に、ゆつくりと筆を取りたかつたのだが、何しろ火のつくやうに出版部から鞭撻されるので、やむを得ず思ひつゝ、まゝに書き進んで行つた。この段、吳々もお詫申上げる。

經濟運動と政治運動の關係は、從來、議會主義者から、二つの分科の如く唱へられて来た。僕はその然らざる所以を、兩者の發生から論述して行きたいと思つた。が、それをやつてゐると、却々、パンフレットでは追つ着かなくなつた。従つて、本書の説明も甚だ十分でない。筆者はこれで十分に満足してゐるものでないことを申添へて置きたい。それから、政治運動の説明も、少くとも、佛蘭西かごこかの歴史を述べて、それを實證的に論を進めて行きたかつたが、やはり同じ理由で思ふやうにならなかつた。

大正十四年八月十四日

788

種々の點で、近い將來、もつと完全な、満足なものを書くつもりである。まあぼつくと、月に一冊位ひの程度でやつて行くつもりである。

一九二五、七、一九

東京にて

著

者

經濟運動と政治運動

中西伊之助

一、汗野玉造の失敗

汗野玉造と云ふある一人の労働者があつた。彼は心から労働者らしい労働者で、世の中で、正義とか自由とか云ふことを唱道する人たちの演説をきくことが好きでもあり、且つ有難くもあつた。

殊に、この玉造は、自分たち労働階級のために、正義や自由を叫んで、労働者解放のために盡してくれる人々を、最も尊敬し、且つ感謝してゐた。さうした性質の労働者だから苦しい、長い労働をしてゐる餘暇には、講演會や、演説會をきくに行つたり、有益な先輩の話などをきくことにつとめてゐた。

ある時であつた、汗野玉造が町を歩いてゐると、ある公會堂の前に「労働黨公認候補自由正義政見發表演説會」と云ふポスターが目についた。

労働黨！労働黨！自分たち労働者の利益を主張し伸長する政黨の立候補政見演説があるのである！「これはいつて見なければならぬ……」

と、その労働者は思つた。そこで、汗野は忙しい用事もあつたが、それどころではない

自分たち階級の利益を主張し伸長してくれる政治家が立候補するのであるから、たとひ自分には忙しい用事があつたにしても、その政見演説をきかねばならぬと思つた。そこで、汗野は演説をきくことにした。

会場は労働者らしい聴衆で一ぱいになつてゐた。数名の辯士が盛んな應援演説をしてゐた。一人の應援辯士は最も熱心にかう云ふことを云つた。

「満場の諸君、我が労働黨の公認候補者自由田正義君は、人格の高い正義の士であります。長い間労働運動界に身を投じて、苦節三十年、學識と經驗に於て、眞に我黨代議士として議會に送ることは最も適任であらうと信じます。どうぞ、諸君の清き一票をお投じ下さい。さすれば自由田君は、議會に於て、必らずや諸君の御期待に背かないであらうことを疑はないものであります」

汗野玉造は、この應援演説をきいて、なるほど、自由田正義と云ふ人は、さう云ふ人ならば、労働黨の代議士になる資格があるに違いないと思つた。しかし、當の本人の、自由田正義の意見をきいて見たいと思つた。いよく、自由田正義が演壇に立つた、満場は破れんばかりに拍手を送つた。

自由田正義は、いかにも堂々とした、立派な紳士であつた、彼は、演壇にあがると、咳

一咳して、千軍萬馬を往來した得意の熱辯を揮つた。

「敬愛なる満場の諸君、私はここに、諸君の前に私の政見を發表することの光榮を感謝します」

と、彼は前置きして、さて論じ始めた。

「帝國議會は、國民の福利増進を目的として設けられたるものであります。然るに今日の議會は、國民一般の利益を代表するものではなくて、一部ブルジョア階級の利益を代表してゐるに過ぎないのであります。吾々プロレタリア階級は、現代の議會に何等の代表者を出してはゐないのであります。即ち現代の議會では、吾々プロレタリア階級の利益は決して代表されてはゐないのであります。故に、吾々はどうしても現代の議會に、吾々プロレタリア階級の利益を代表するために代表者を選出して、吾々プロレタリア階級の福利増進を計らねばなりません！」

ヒヤヒヤ、その通り——と云ふ叫びが起つた。

汗野玉造は、それをきいて、他の聴衆と同じやうに、非常に感動した。そして一緒になつて拍手をしたのであつた。

「不肖私は、長い間、労働組合運動のために努力して來ました。そしてそのうらに、私

は、労働者階級が、現にブルジョアに支配されてゐる政治機關——即ち現在の議會に代議士を送つて、十分に權利を主張し、利益を増進すべきことの必要を痛感したのであります。労働者は、經濟行動による解放の外に、更らに現在の議會に侵入して、政權を自己の手に収める目的をもつところの政治行動によつてその解放を促さねばならないのです。自由田がかう叫ぶと、再び素晴らしい拍手の波が躍つた。中には、口笛さへ吹いて、賛意を表するものさへあつた。

『どうか諸君、諸君の清き一票を、私に投じて下さい。私が諸君の御投票によつて、首尾よく議會に席を占めることができましたら、私は議政壇上に於て、彼等ブルジョア階級の代議士と火花を散らして戦ふことを誓ひます。そして諸君プロレタリア階級——労働者階級の福利増進のために奮闘努力すべきことをこゝに宣明するものであります！』かう説き來ると大向ふは、やんやと大合采をした。手を拍ち、床を踏み鳴らして、さすがの廣い會場も破れんばかりであつた。汗野は、自由田正義の演説にすつかり感心してしまつた。根が正直で、生一本の労働者だから、自由田の堂々たる論理正しい雄辯を信じ切つて、彼の労働者階級にたいする誠意の熱烈なのに感謝したくらいであつた。そこで、汗野玉造は、この尊敬すべき無産政黨運動の先驅者、プロレタリア階級の闘將

にたいして、自分の清き一票を投ずることにした。

自由田正義は、玉造のやうな眞面目な労働者たちの選挙を受けて、首尾よく當選した。そして、立派な労働黨の代議士になつた。

新しい無産政黨の中に、自由田正義の名は明星のやうに光つた。議會の花形として輝やかしい彼の姿は、いつも新聞記事を賑はしてゐた。

が、自由田の無産政黨は、議會に多數の議席を有してゐたが、労働者の利益増進については、まるで忘れられたやうに、なんにもしてくれなかつた。新聞記事は、議會の開會中、自由田正義の名の見えないことはなかつた。が、しかし、自由田は、曾てその立候補の政見發表演説に勝つたことは何一つとして實行しようとする氣色は見えなかつた。

労働者汗野玉造は、少しく考へた。自由田が、あの演説會で演説したことを、いつ實現しようとしているのかを疑ひはじめた。そこで、玉造は、一日、自由田正義の邸を訪ねることにした。

玉造は、自由田の玄關先きへ立つて、自由田に面會したいと申込んだ。と、そこへ出て來た自由田家の書生は、玉造にかう答へた。

『先生は今日宮中からの御陪食を仰付けられて只今御留守でございます』

そこで、玉造は、書生に向つて云つた。

「留守なればやむを得ないが、俺は自由田正義君の演説をきいて清き一票を投じた労働者だ。就いては自由田君が歸つて來たらさう云つて貰いたい、自由田君が立候補の政見演説をした際の労働者にたいする聲明はとうしたのだ。その後新聞にはいつも名前は見ねるが、あの時の聲明の實行は全くなんにもしていないぢやないか、またしようとも考へていないやうだ。一たい自由田君はどうしているのかきいてみて貰いたい」

汗野は、その日は歸つたが、翌日、再び自由田の邸へ出かけて、昨日の返事をきかせろと迫つた。と、自由田は、今日もやつぱり邸にはいなかった。そして玄關まで出て來た書生は、汗野の姿を見ると、いかにも面倒臭い云ふたやうな顔をして云つた。

「先生は今日は外務大臣の園遊會にお出かけになつてゐます……」

「なんだ、今日も外務大臣の園遊會だ。一たい自由田君は、毎日何をしてゐるんだ、昨日は宮中の御陪食だと云つて居るかと思ふと、今日は外務大臣の園遊會だと云ふ。それで労働者の解放ができるかと考へてゐるのか」

さすがのおとなしい汗野玉造も憤つた。すると書生は「なんだ、この薄汚ない労働者め、何を失敬なことを云ふのか」と云はないばかりな顔をして玉造をながめてゐた。

「それで俺の自由田君への傳言はどうした。自由田君はどう云つたか」

「先生は君のやうな人は名前も聞いたことがない、云つてゐられた。それに君のやうな人の意見を一々きいてゐた日には限りがない、黨には黨議と云ふものがあつて、黨員は自分一人の意見で何んにもすることができないのだと云ふことだつた」

と、書主は答へた。そこで、汗野玉造は、すごとく家に歸つて來た——

この話は、日本ではない。世界の中でも、完全な普通選挙法の敷かれてゐる、しかも労働黨が内閣まで組織したと云はれてゐる英國のことである。しかし、日本は、今は労働運動界の一轉機をなしてゐる。即ち、曾て労働組合運動は、現代の政治なるものと、全く無交渉で進んで來たものが、最近、非常な勢で、政治運動の大勢をもたらして來た。そして將來、日本の労働者は、この汗野玉造と同一な運命に陥らなければならなくなつた。僕はこので、なせ政治運動は、その本來の性質上、さうして墮落せねばならないかと云ふ譯を話してみたいと思ふ。

二、清い水と濁り水——敵味方

そこで、この政治運動が、どうして墮落するのか——さう云ふ性質をもつてゐるのかと

云ふことを説明するのには、何よりも先ず政治運動の發生を明らかにするに在る。言葉を換へて云へば、元來、政治運動の正體はどんなものかと云ふことである。幽霊の正體見たり枯尾花と云ふ通り、政治運動も、よくその正體を見きわめて、それは幽霊であるか、または枯尾花であるかをはつきりと見定めて置かねばならない。

一た、世の中の學者は、社會改造——即ち労働者解放の運動には、いつも二つの道がある。その一つは、政治的行動（この場合は議會主義）であり、その二は經濟的行動である。そしてこの二つは、常に併行して、恰かも鳥の兩翼の如く、車の兩輪のやうである。成程、この説を一寸考へてみると、いかにも道理のやうに受取れる。たとへば、吾々の日常生活には、いつも政治的なものと、經濟的なものがある。即ち、日常生活では、法律に服従しなければならぬ點は政治的であり、飯を食はねばならぬ點では經濟的である。そしてプロレタリア階級は、いつもこの兩面に極度の壓迫を受けてゐるのであるから、吾々が自由を求めるためには、この兩面から解放されなければならぬと云ふのである。この理屈は一見、甚だ理に合つてゐるやうである。いかにもお説ごもつともと云ひたくなる。が、吾々は、もつとよく考へてみよう。經濟的自由と共に政治的自由もどより必要である。

吾々は經濟的壓迫を受けてゐると同時に政治的壓迫もまた受けてゐる。その壓迫を除くために、經濟的行動によつて經濟的壓迫を、政治的行動によつて政治的壓迫を除かうとするのは當然のことである。吾々と雖も、それを否定するのではない。しかしだ、吾々は、その政治的壓迫を日本の政治運動者の主張する議會利用主義でもつて達成し得られるものとは信じない。否、さう信じ得られないばかりではなく、むしろ、議會を利用することは無用有害であり、現在の労働者階級を迂路、迷路に導き、結局、彼等の解放の途を阻止するものであると主張するものである。即ち、吾々は政治的自由を要求するにも、やはり労働者の經濟行動をもつてこれに對抗するより外にはないと主張するのである。所謂政治行動即ち議會政策ではだめである。主張するのである。今その理由を述べることにしてしよう。人類の生活の中で、經濟運動と政治運動は、いかにして起つたかと云ふに、それは決して二つの運動が最初から同時に平行して起つたものではない。それは鳥の兩翼の如く、車の兩輪の如く發達したものではない。人類の生活は經濟運動が何よりも最初に起つたものであつた。人類の經濟運動は人類が發生したと同時に起つたものである。然るに人類の政治運動は人類が社會を形作つて後、幾萬年の後に、ある特種なる個人主義的勝利者の手から發生したものである。この人類の社會に、特權階級が生じ、その階級が、階級的利己

心、征服心、野心を逞ふせんために考へ出された運動が、即ち政治運動である。故に、経済運動は、人類本来の運動——即ち合理的なる創造的運動であるが、これに反して、政治運動は、一部少数の特権階級的支配慾、征服慾、野望を満足せんがための必要から起つた非合理的、反創造的運動である。故に、経済運動は、即ち全人類に一貫したより善く生きんとする意志から流れ出した清い、美しい泉の水である。が、これに反し、政治運動は、他人を征服し、搾取し、利用し、奴隷化し、瞞着せんがために絞り出された汚れ切つた濁り水である。故に、この二つの水は、本来、敵と味方であつて、永久に一致し、併行するものではないのである。従つて、この一方の清い水の中へ、一方の汚れた水を混入するならば、大せつな人類の生きた泉は忽ち汚濁に沈まねばならないのである。今その危機が來てゐるのである。労働者の清き泉に、濁り水を注がんとする悪魔は何者ぞ！

三、政治運動の正體

唯かう云つたばかりでは、まだはつきりと解らぬ人があるかも知れない。そこで、もつと詳しく、もつと碎いて、この清い水と濁り水との定量分析を歴史的にやつて見よう。先づ、人類の原始生活はどうであつたかと云ふに、太初の生活は樹上生活であつた。こ

れはモルガンの説明を俟つまでもなく、支那人さへもチャンとその事は歴史に書いてゐる。即ち十八史畧の最初のページには、樹上氏何千歳と云ふのがある。樹上氏とは、文字通り樹上氏である。エンゲルスは、この樹上氏時代の最も大なる文化的功績は、音聲に曲節が備つたことであると云つてゐる。

さて、この樹上氏は、地上は、もう白聖紀の犇猛な狐虫類は滅亡したのを知つて地上へ下りて來るやうになつたのである。人類歴史は、埃及のチプリス、ヤウフラテス河畔から起つてゐるが、少くとも、人類は、ア、した豊沃な食物のある河畔を求めてそこで社會を作つたものであらうと思はれる。あのへんの水草を追ふて遊牧したものであらう。で、樹上の食物は主として果實であつたが、地上へ移住するやうになつてからは、動物食——即ち肉食を初めて來た。最初に手に入れたものは蟹の如き甲虫類であつたが、石を投げて禽獸魚類を獵するやうになつてから、石と石と相搏つて、そこから火を發見した。と共に石器の發明——主として武器を工風するやうになつて來た。火を發見するに従つて、火と石（鑛物）の生活、中から、更らに鐵を發見した。即ち鐵器時代が來たのである。で、鐵器の發明は、鐵の武器を工風する、そこから、大植物の伐採に着手することになつた。この時代に、人類は穴居より脱して、建築家屋に住むやうになつた。

人類の樹上生活から、鐵器時代までを、このパンフレットの僅かに一頁くらゐで説明してしまふと、人類生活の進歩はなんの造作もないやうであるが、實は決してさうではない。その間には實に數千年（或は幾萬年）の人類の不斷の努力がある。より善く生きんとする強烈なる意志が一貫して繼續してゐる。即ち、人類の純眞なる經濟運動が絶間なくつづけられてゐるのである。

人類が樹上の狭い貧弱な生活から、埃及河畔の廣汎な豊沃な地上に住むことに努力したのは、よく考へて見ると容易のわざではない。東京から大阪へ、大阪から東京へと移住するのさへもなかなかの決心と勇氣が必要である。然るに、猛惡な野獸の住む地上へ、長い間の樹上の生活から移住しようとする努力は容易なものではなかつたに違ひない。それは現代の人類が、陸上生活から海上生活に移住しようとするより以上の大革命であつたらう。しかし、人類は、太初の生活運動——經濟生活革命のために、この大事業を爲し遂げたのである。それには、勇敢なる先驅者もあつたであらう。悲壯なる殉難者もあつたであらう。しかし、人類のより善く生きんとする意志がそれを成就せしめたのである！經濟運動の強烈なる努力による外、決して爲し遂げることのできない事業であつた。更らに、火の發見、石器の發明、鐵器の成功、建築家屋の創始等、長い間の人類の生活

は、一つとして人類の強烈な創造精神より生れたる經濟運動でなかつたものはないのである。

そしてこの長い時代に、人類は一定の社會と云ふものを作つた。即ち多くの村落と云ふものを作るやうになつたが不幸にして、人類がこの村落を作つた時代から、人類には少くとも、二つのはつきりした階級が生れてゐた。それは、支配者と被支配者階級であつた。氏族の首長とその配下がそれである。そこから、所謂最初の政治が始まつたのである。そして、首長は、政治の支配者であり、配下は被支配者である。言葉を換へて云へば、前者は征服者であり、後者は被征服者であつた。そして、前者は、いかに巧みに、後者を支配すべきかに苦心して、政治機關を創始し、それを合理化するために政治哲學を考へ出した故に、支配者には政治運動はあるが、被支配者には政治運動はない。

さあそこで、一たい、人類の過去の社會に、なせそんなに二つの階級ができて來たのだらうと云ふことである。この階級が生れて來た動機をよく理解しないと、現代の政治運動の性質がはつきりと理解されない。

人類が樹上生活から地上に下りて來た時代には、さうした階級はなかつた。遊牧時代に

の土地に社會を作つてゐなかつたからである。

人類が一定の土地に居住して、一つの村落を作るやうになつてからも、特殊階級の支配のない共産制が行はれてゐた例は多くある。原始共産制と云ふのがそれである。が、人類の中で、私慾を逞ふせんとする人間が出現して、過去の平和な生活を攪拌しようとした時から、この人類の生活には、特殊な状態が生れて來た。即ち、人類の中で、私慾の盛んなものが、自己の力で、他の善良な人間の生活權利を奪ふとして、遂にその目的を達した時代から、特殊の階級が生れたのである。つまり、原始共産制から私有財産制時代に移つたのである。またこの時代から、政治と云ふものも生れて來たのである。故に、人類の經濟運動と政治運動とは、發足點が全く違つてゐる。

では、原始共産制時代には、秩序と云ふもの、共同の事務と云ふものがなかつたかど云ふに、それは立派に有つた。それは、ロシアの共産村落——即ちミルに於ては、ウエーチの鐘の音をきいて、村落の人々が集つて、平和な共同の事務を取つたと云ふが如きはその適例である。が、その共同事務は、斷じて、今日の所謂政治ではない。今日の政治は、そのウエーチの鐘の音が絶へて、ロマノフ家が東方より來つて彼等を支配した政治である。故に、平和な共産村落の共同事務は、本質上、人類の經濟運動——よりよく善きんとする

意志の體現であつて、支配に依る政治運動ではなかつた。もしこの兩者を混同するならばそれは歴史の事實を無視した無知の迷妄である。か、又故意に政治運動を辯護しようとする徒でなければならぬ。

そこで、今日の政治運動の根本精神は、支配者の私慾、野心、搾取の種々の血が流れてゐる。これを經濟運動の根本精神から比べると、似てもつかぬ正體のものであることが解るのである。然るに、この二つのものを、全く同一の性質である如く考へ、楯の両面の如く考へ、鳥の兩翼、車の兩輪、少し六ヶ敷く云へば、人類解放の二つの分科であるとして考へるが如きは、大きい迷妄であつて、さう云ふ考へ方をしてゐる人ももし正直にそう考へてゐるならば、その人たちがいかに現代の支配者教育のために眼をくらまされてゐるか、解るのである。またもし、この人類歴史の事實をよく知りながら、尙ほ且つ現代の政治運動をもつた人類解放の手段であると主張するなれば、それこそ、過去の支配者と同一の支配慾、征服慾、搾取慾を心の内部に包蔵して、口に人類解放——プロレタリア階級解放を看板にする眞赤なにせ物であることを知らねばならぬ。

四

人類解放の手段は、たつた一つある。それは人類の經濟運動に依る強い精神活動である

断じて、今日の議會——政治機關を利用して達し得られるものではない、で、更らにもつとこの二つの運動の關係について述べてみよう。

前にも述べたやうに、經濟運動は、人間がこの地上に現はれた時代から直ちに起つた運動であるが、政治運動は、すつとその後で起つた支配階級の運動であつた。故に、人類の本能的運動は經濟運動であつて、政治運動は人間が他の人間——言葉を換へて云へば、少數の者が他の多數のものを支配しようとする嘘の運動である。

政治運動は、その起原から云ふと、人類の社會が起つてその中に支配者が出来て、その支配者が他の多數者を支配しようとする必要が生じた時から起つたものである。故に、政治運動は、いかにその運動の中で、多數の利益にならうと努力しても、政治そのものが支配者の必要から生じてあるのであるから、それは支配者階級に都合のいゝことばかりで、決して多數の人々の利益を計り得るものではないのである。

ロシアの古いお伽噺の中に、こんなのがあつた。

ある町に澤山の犬が住んでゐた。その犬共は、そこから程近い森の中に、多くの狼がゐて、その狼が、いつも町へ出て来ては、犬共を喰ひ殺すのであつた。そこで、犬共は非常に不安と恐怖を感じて、なんとかして、狼共を町の方へ寄せつけまいと苦心した。

ある時などは、犬共は、仲間の中の最も強さうな、狼に比敵するくらゐな若い勇敢な犬を撰抜して、森に遠征せしめたこともあつたが、いつも、散々に敗北して歸つて来た。歸るのは、いゝが、その大半は討死して、屍は憎い狼共の好餌になつてしまつた。しかし犬共はそれに懲りずに、幾度もくも遠征したが、やはりいつも敗北してしまつた。

そこで、犬の中でも、色々ものを考へる奴がゐて、いつまでもかうして正面から戦争をしてゐては、味方は損害するばかりだから、なんとか平和な手段で、うまく狼共を退治する工風はないものかと首をひねり出した。

その中に不思議なことが出来上つた。それは、狼方からの使者が、犬の國に来たことであつた。その使者の云ふには、實は狼の國でも、あまり戦争は好まないのだ。いつも犬の方から遠征されると、たとひ犬は狼より弱くても、何しろ數が多いから、なか／＼の苦戦である。そこで、一つこゝは双方で和睦をして貰いたい。そして森と町との餌をおさる分配は、双方から代表者を選んで平和の中に取り決めようではないかと云ふことであつた。狼の癡狂なことはよく知つてゐる犬共も、狼の方からさう云はれてみると一概にはねつけるわけにはゆかない。そこで、相談の末に犬の中から最も伶俐さうな若者を選んで、狼の森の會議に出すことに一決した。多くの犬の仲間から選ばれた犬は、意氣揚々、威

儀堂々と森の會議に出て行つた。

町にゐる犬共は、もう今頃は、先方と會議をすまして歸る頃だと待つてゐたが、犬はなかなか森から歸つて來なかつた。そしてその月も過ぎたが、犬はやはり歸つて來なかつた。そこでこれは待つつきり、狼共に喰ひ殺されたのだと思つて、犬の國は大軍を召集した。そして再び遠征をすることに定めた。もしこちらから行つた犬が、一疋でも殺されてゐたらあの狼の森を取り捲いて勇しい弔合戦をしてやらうと意氣組んだ。で、犬の大軍は、問罪使を先に立て、旗鼓堂々と森に向つた。

ところが先方へ行つてみると驚いた。先月選ばれて行つた犬は、先方の狼の娘と結婚して、すつかりいゝ氣な花婿氣取りになつてゐた。そして彼等の云ふことが振つてゐる。

『一たい、狼の國は人々、いや狼口が少くてどうも子供が生れない。それでいつまでも抛つて置くと、狼の國は滅亡する。これに反して、犬の國は、あまり人口、いや犬口が多過ぎる。それでいつまでも抛つて置くと同士討ちが始まつて犬の國も滅亡するに違ひない。そこで、狼の國と犬の國は、相互に一つ利益のある條約を結ぶことにした。その條約と云ふのは、狼の國では、犬の國から最も強さうな、いくらでも子供のできさうな、また將來狼になり得るほど体格のいゝ犬を狼の國に送つて、狼の娘と結婚させる。その一方、

犬の國で全く役に立たない廢犬や、藝のない野良犬は、たゞ犬の國の糧食を浪費するばかりだからそれを狼の國に送つて狼の食料に供給する。さうすると狼の國は人口が殖へて滅亡を救ふことになるし、犬の國は人口が減少して同士討ちがなくなるからこれも滅亡を救はれる。双方最も利益のある條約を結んだ。それで先づ實行の手始めとして自分たちが狼の娘と結婚したのだが、明日あたりは犬の國へ歸つて人民たちに報告しようと思つてゐたのだ。なんと妙案ではないか』

と云つて得意な顔をした。——と。

一たい、政治家と云へば、この犬の代表者のやうに、理屈はなか／＼巧みである。そして多くの人民を胡麻化するのであるが、しかし、たいいていの人民は、それを本氣に受けて信じてしまふ。そこが狼と云ふ支配者と、犬と云ふ人民の間に行ははれるからくりである。そのからくりは、大昔から、ちやんと支配者の手の中に出來てゐるのである。この技術がつまり政治運動の本質である。

政治運動は、かうして、一見すると、一寸その正體が解らない。頗るこみ入つてゐて、素人が見ても却々はつきりしない。だから、表面、政治家がうまく理屈をつけると、すぐそれに乗つてしまふのである。

普通選挙が行はれて、無産政黨のできた場合は、無産者の代表者が議會に出たら、きつと無産者の利益を計つてくれるだらうと考へるものがあるかも知れない。ちよつと考へると、成程、さうすれば、十分に無産者の利益が計られるやうにならうと思はれる。が、却、さうは行かない。やはり犬の國から犬の利益を代表する犬を出しても、その利益は少しも代表されないので同じことである。それは狼の國の「犬」になつたからだ酒落れてもゐられないのである。

これに反して、經濟運動は、甚だ解り易い、二二が四と云ふ數が解れば經濟運動は解る筈である。それは何故かと云ふに、經濟運動は人間の本能から生れて來た純粹の生活運動だからである。

經濟運動は自力宗である。人手を借らないで、自分が自分の生活を改造しようとする運動である。決して人手を借らないで、自分の腰を起して、自分の手ですべての自分の生活を改造して行かうとするのが經濟運動である。

政治運動は、あくまでも他力宗である。一萬、二萬の多數の人が、たつた一人の人に、自分の生活改造を頼むのである。二階から目薬と云ふが、富士の山から目薬にもならないほど利き目はない。甲の人が乙の人を代表してさへも決して十分に利益を代表してはくれ

ない。それが一人で一萬人、二萬人と代表するのが、今の代議政治である。そんなものをたよりにしてゐては今日の生活を改造することはできないのである。

そこで、この代議政治と云ふものは一たいどう云ふものかと云ふことを述べてみよう。元來、政治と云ふものが、一國の支配者の手に占有されてゐると、その政治と云ふものの性質がはつきりと理解される。即ち封建時代の大名が自分の領土内の百姓を治めるために行ふ政治と云ふものは、大名が自分の權力を支持するために必要な手段であつて、彼等の口にするやうな民の幸福を計るためのものではないと云ふことが、はつきりと解る。そして、またいかに昔の大名が民を虐げて私慾を選ふしたかと云ふことも、歴史が説明してゐるから、いかに巧みに胡麻化さうとしても、ちよつともものを考へるものだつたら、その手にのゐることはなからう。專制政治家がこの種類である。

が、近代政治——即ち代議政治となると、これは少し目の先きが變つてゐるだけに、政治と云ふもの、正體が朦朧として來る。そこがつまり支配階級の奥の手で、たれも一ばい喰はされることになるのである。そして『專制政治家』が『民衆政治家』と云ふ旨い名に代つて、綿羊の皮衣を着た狼となるのである。しかし、この『民衆政治家』が、今度は『無産階級政治家』とペンキの塗り替へをやると、愈々、益々判断がつかなくなつて來る

專制國時代の專制政治家と云へば、何人もそれは人民の敵だと考へる。しかし、それが代議政治に代つて、その中から『民衆政治家』と云ふ美名もつた『專制政治家』のさなきから生れた蝶々になると、それはいかにも『民衆』の幸福を考へてくれるやうな氣がする。更らにも一度姿を變へて、『無産階級政治家』と云ふ、すばらしく美しい翅色をした蝶々に代ると、もう全くこの美しい翅に目が眩んでしまつて、そはまるで民衆の福利を増進するために天降つて来た天使の如く考へられる。

そこで、最初の專制政治家から、次に民衆政治家、更らに無産階級政治家と、次第に翅色の變つた蝶々が生れるがしかし、その三つの蝶々は、一たいどんな性質を持つてゐるものかと調べてみると、どれもこれも、翅色だけが異つてゐるばかりで、腹の中にもつてゐる毒汁はみんな同じものである。唯異なるところは、專制政治家と云ふものは、專制國の獨裁政治のさなきから生れ、民衆政治家と無産階級政治家はブルジョア代議政治と云ふさなきの中から生れた兄弟に過ぎないのである。

それならば獨裁政治と代議政治とはどこが異ふかと云ふに、それはいすれも同じ性質のものであつて、獨裁政治は割合に少數の人——たまには一人の人間がその時代の支配階級の利益を中心にして政治を行ふのであり代議政治とは割合に多數の人が集つて、やはり支

配階級の利益を中心にして政治を行ふのである。その政治は、共に支配階級の利益を中心にすることに於て同一である。

なせ獨裁政治——即ち專制政治の代りに代議政治が行はれるやうになつたかと云ふに、それは、もういつまでも獨裁政治では人民が承知しなくなつたからである。つまり、支配階級が代議政治を行ふやうになつたのは、人民の幸福を計ると云ふやうな目的ではなくて、なんどかして自覺して来た人民を胡麻化さねばならないと云ふ必要から起つたものである。故に、たゞひ代議政治と云ふ美名を冠せても、その裏には、やはり支配階級の專制政治、獨裁政治と少しも變らぬ慾望があるから、どんなにその代議政治を運用しても、人民の利益になるやうな政治を行はせないやうにちやんと準備ができてゐる。つまりからくりができてゐる。丁度奇術師の奇術のやうなもので、人民はそのトランクを自分の手でひねくつてみても、なか／＼奇術師がやつて見せるやうな工合には行かないのと同じことである。だから政治と云ふものは、支配階級の特産物で、民衆がもしそれを自分の爲めにやつてみようとしても、決してできるものではないのである。できるやうに思ふのは、奇術師の奇術を見て自分もやれるものだと思ふのと同じの錯誤である。

五、一杯喰ふな

ところが、経済運動となると、これははつきりと民衆のもの、プロレタリアのものである。

諺にも、生兵法は大怪我の元と云ふ通り、プロレタリアが、支配階級から生れて来た政治運動などをやらうとすると、それはいつの間にか支配階級の心理になつてしまつて、自分がプロレタリアであることを忘れてしまふことになる。そこで、プロレタリアには、プロレタリアらしく、はつきりとした経済運動の方に力を注いでゐれば、きつと解放されるのである。そして政治的壓迫もこの経済運動一方で行けば、自然と立派に排除されるし、政治的利益も立派に獲得することができるのである。そこで、経済運動の性質をもつと詳しく述べて見よう。

経済運動が、人類の原始生活から一貫して續いて来たことは前にも述べた通りである。その運動は、原始生活から現在まで、一貫して同じ性質で動いてゐたものではあるが、しかし、その方向は大いに異つて来た。即ち、遊牧生活から、少くとも原始共産制時代までの間は、人類の経済運動は自然に向つてゐた。自然の征服に向つて一致協力してゐた。自

然を征服して、そこから人類の生活資料を得ようとする運動であつた。そしてその當時の運動は、階級的ではなく、全人類的であつた。全社員が、すべて一致協力して外在の生活資料を獲得するための経済運動であつた。それは社員全体の努力が、一つの経済運動に向つて働きかけてゐたのであつた。

人類の社會に征服、被征服の事實が現はれて來、原始共産制から私有財産制に代つて來た時代になつて、人類の社會にも階級が生ずるやうになつた。

そこで人類はこゝに二つの大きな運動の分野を生ずるやうになつた。それは一部の階級は政治運動と變じ、一部の階級は從來の経済運動の方向を、單に外部の自然に向けるばかりではなく、他の一部の階級（即ち政治運動の必要を感じて來た階級）に向つて、公然、或は穩然と抗爭して、自分の生活充實のために戦はねばならなくなつて來た。この階級が現今ではプロレタリアと名づけられる階級として存續して來たのである。

この人類の社會が、少くとも二つの階級に分れて、一つは支配階級となり、一つは被支配階級となつた時代から、人類が從來取つて來た唯一の生活運動である経済運動（精神運動がなかつたとは云はない）は、もう今までの如く單純に外部（自然）にばかり向けてゐられなくなつた。そして支配階級は政治運動の必要を生じて來たし、被支配階級は経済運

動の方向を、人類内部の支配階級に向つて轉換しなければならなくなつた。即ち、こゝでは、人類はもう二つの級階に分れて、一つは政治運動を持つて武器とし、他は經濟運動を以て武器として、互に戦はねばならなくなつて來た。

何故に、一方は政治運動を武器としたか、また他の一方は從來の經濟運動をつゞけて行かねばならなかつたか、そこには十分の理由が存在する。即ち、政治運動を必要とした級は、最早、その時代は生産階級ではなかつた。經濟運動をしようにも、それをすることのできなかつたのである。生産階級でないものが、經濟運動のできやう筈がないのであつた。その代りに、武力の擁護のある政治運動を用ひたのであつた。が、一方の被支配階級——生産階級は、從來の如く經濟運動をつゞけた。つゞけざるを得なかつたのである。またつゞけるのが當然であつた。それでこそ自己の解放が完全に行はれるのである。

プロレタリア階級が、なぜ政治運動に携はると墮落するのか、それは、政治と云ふものの中に、支配者階級心理と云ふ毒があるからである。プロレタリアが、政治運動の中にはいつてしまふと、その中毎症を起すからである。政治はあくまでも支配者心理でなければやれないものであるからである。この書の一ばん最初に擧げた英國の労働者も、また、ロシアのお伽噺の中の犬も、どうしてさう墮落するのかと云へば、すべて政治運動と云ふものゝ中毒にかゝつてしまふからである。

そこで、労働者は、一たい今後、どう云ふ方針で進んで行かねばならぬかと云ふに、それは、生一本の經濟運動——即ち労働組合運動であくまでも押して行かねばならない。この次の新しい時代を作る母胎である労働組合は、決して政治家などの手に汚されてはならないのである。

若し、労働組合が、政治家——たとひ無産階級政治家と云ふ美名をつけてゐても——の手で、その野心の具に供せられることになれば、それこそ労働組合は滅亡である。純眞なる労働組合は、四分五裂して、野心家の喰ひ物になつてしまふであらう。

労働者が、この労働組合運動を、あくまでも強くやつて行けば、労働者の解放は、きつと遂げられる、そして現代のブルジョア政治の壓迫も、十分に排除せられるのである。

それでは經濟運動を主張するものは、現代の政治的壓迫、又は政治的利益はまるで度外視してゐるのかと云ふに、決してさうではない。經濟運動主義者は、むしろ今の政治運動主義者よりも、つと強くこの政治的壓迫、又は政治的利益の獲得（政權ではない）を追求してゐる、が、それは政治運動主義者と考へ方、やり方が違ふだけである。その理由を述べよう。

現代では、ブルジョアが政治上の権力を握つて、その保護を受けてゐる。それは何故であるか、それはブルジョアが現代の経済力を握つてゐるからである。あらゆる現代の経済組織が、ブルジョアの勢力であるからである。その経済的勢力が、つまり政治的勢力となつてゐるのである。即ち経済力が根で、政治力が枝である。そこで、プロレタリアは、この経済力の根に向つて解放運動の方向を向けて行かねばならない。と云ふのである。枝の政治の方へぶら下つてみても、根がビクともしないのであるから、その運動は徒勞である。と云ふのである。

故に本當の経済運動の中には、経済的利益を獲得すること共に、また政治的利益の獲得もある。しかし、それは、世の所謂政治運動家や、政治家の希望するやうな、代議士を志願して、議會で椅子を占めることを云ふのではない。プロレタリアの政治的利益は、議會へ代議士を送つても得られるものではない。

それでは、経済運動一本調子で進んで、どうして政治的利益が獲得されるかと疑ふものがあるに違ひない。

現代日本の所謂政治運動と云へば、議會へはいつて、代議士になつて、議席を多數に占めて、その上で悠々と法律を作つて、それをプロレタリアの利益のある方法に運用しよう

と云ふ意味であるが、そんなことをしてゐては、決してプロレタリアの政治的利益と云ふものは永久に獲得することはできない。たとへば治安維持法である。あの法律は、今後、日本の所謂労働黨が、幾年かゝつて議會で叫んでも、決して撤廢されはしない。これは將來日本の無産政黨の行動を監視してゐればよく解ることであらう。

これに反して、日本の労働者の組合が発達して、十分に實力を養つたならば、あの法律は立ち所に撤廢し得ること受合ひである。議會で所謂無産派政治家が十幾年もかゝつてやることのできなかつたことが労働者が團結して一日の間にやつてしまつたと云ふ實例は、歐米ではいくらかもある。

重ねて云ふ、人頼み、人任せでは、プロレタリア階級の解放はためである。五萬人、十萬人と云ふ雑多な人々を、僅か一人や二人が代表して、それが議會へ集つてブルジョア政治家、官僚政治家と相談したつて、何ができるものか。そんなことをあてにしてゐる間に労働者は餓死してしまはねばならない。もし『清き一票』を投するくらいで、プロレタリアの解放ができるならば、今頃、英國、獨逸、佛國、米國等は、プロレタリアの樂園になつてゐる筈である。

これらの歌米のプロレタリアは、この『清き一票』で一ぱいも二はいも喰つて來た、日本のプロレタリアは、彼等の失敗をいゝ手本にして、決して馬鹿を見ぬやうにするがよい。

祝出版部設置

大阪都新聞記者

長尾桃郎

機關誌「交通働勞」發行

日本交通働勞總聯盟

事務所 東京市芝區烏森ノ一

機關紙「組合運動」發行

關西働勞組合
自由聯合會

大阪市港區九條中通リ四丁目三〇八

大正十四年七月廿八日印刷
大正十四年八月一日發行

定價金拾錢

著者 中西伊之助

大阪市港區八幡屋町二四八

編輯發行 遠藤喜一

大阪市東成區中道町五一

印刷所 舟町印刷所

發行所

大阪市港區八幡屋町二四八

日本交通働勞總聯盟

大阪交通働勞組合出版部

サベツテツパイ

ポーリボツタクリ

大阪市電戎橋停留所前

古本大學

ブルも來いプロも來い
毛の長い奴も來い坊主も來い
客の種類は問はない
茶瓶の本屋を儲けさしてやら
うと云ふ持志家は皆來い

築港千舟橋

光陽文庫

特115

788

發行所 東京市四ツ谷區新宿一ノ五一 聚芳閣書店

人類の罪——それはいかにして人類の中から生み出されるか。殊に、虐げられたるプロレタリアの罪が。

この書は、農村から都會へ出て來た正直な一青年が、ブルジョア社會の爛熟せる美しき女に魅惑せられて、刻々に恐ろしい罪の深刻に陥つて行く經路を、肉太い線でもごたらしく描き出された生ける人類の血塊である。そこにプロレタリアの怨恨と、都會呪咀の呻めきがある。そこにブルジョアの罪惡と毒汁が流れてゐる。

人よ、來りて「この罪を見よ」

中西伊之助著

長篇
小説

この罪を見よ

(定價壹圓八拾錢
郵稅拾參錢
九月發賣)

祝出版部設置

毎月「リーフレット」發行

關東勞働組合聯合會

東京市芝區濱松町
四丁目十三番地

廣島紙勞働者組合

廣島市外中田村

東京市芝區新櫻田町一九

上告専門所

辯護士 山崎今朝彌
電話銀座持三〇七七番

月刊雜誌 祖國と自由
旬刊新聞 關西アドヴァタイザー

文明批評社

同人 一人 同人
大阪市住吉區住吉町一六七

社會主義
勞働問題
農村問題
パンフレット出版及取次
カタログ進呈(二錢)

勞働問題研究所

大阪市西淀川區海老江町九五五
振替大阪七二一八三番

機關紙「印刷工聯合」發行

全國印刷工聯合會

東京市京橋區木挽町二ノ一

公共事業關係者必讀書

關西各電鐵の爭議顛末と批判

第四版 四六判 六百四十頁
定價二圓 送市內六錢 市外二十錢

電車ストライキ

編輯發行者 東京市京橋區弓町一 兼 田次郎

全國の労働組合にして寄贈漏れは此際編者宛至急申込あれ、進呈す
労働者諸君には特に大阪交通労働組合に於て實費壹圓(要送料)にて頒つ

終